

# 児童期から青年期における愛着スタイルの変化

—影響を受けた友人に着目して—

15003PCM 井手 奈幸

## I. 問題・目的

青年期は、親子関係から友人関係へと愛着対象が移行していく時期である（森下・三原，2015）。内的作業モデル（Internal Working Model：以下 IWM と略す）とは、愛着対象者との相互作用を通じて構築される、愛着対象者や世界、自己への心的表象のことであり、他者に関するモデルと自己に関するモデルの2つの要素からなり、ポジティブかネガティブかで、4つの愛着スタイルに区別される。

森下・三原（2015）によると、IWM は、幼少期に形成されるとしても、その後に関係や体験を通じて徐々に変化していく。久保田（1995）は、IWM の更新や修正を行わないことは、適応行動が阻まれる要因になると示している。

Rholes & Simpson（2004 遠藤・谷口・金政・串崎訳 2008）や岡島（2008）によると、ライフイベントに対する主観的認知と、ライフイベントが生じたときに関連する重要な対人関係の主観的認知が IWM に影響を及ぼしていると述べている。

これらのことから、IWM の変化は、特定の他者との間で変化がもたらされた経験と、その他者に対する主観的な認知が影響を及ぼしていると考えられる。しかし、具体的に変化の過程を検討した研究はなされていない。IWM の変化に影響を及ぼす可能性のある青年期の対人関係について検討することは、社会適応を援助するための介入を考える上で必要なことだと考えられる。岡島（2008）は、青年期は、IWM の可逆性がかなり減少していると述べているため、本研究では、青年を対象とし、友人との関わりによってどのように愛着スタイルが変化していくかについて検討することを目的とする。

## II. 研究1

### 1. 目的

質問紙調査による統計的な分析によって、児童期と青年期の IWM の変化が、友人との関わりによどのような影響を及ぼすのかについて検討する。仮説として、友人が愛着対象となり、友人に対して信頼感を持つことで、見捨てられ不安、親密性の回避が低くなると考えられる。

### 2. 方法

**調査協力者と手続き：**私立 A 大学に在学する、390名（男性84名、女性306名、平均年齢19.85、 $SD = 1.17$ ）を対象に質問紙法調査を行った。また、影響を受けた友人がいると回答した場合にのみ、友人を想起してもらい、友人に対する質問に回答してもらったところ、291名（男性61名、女性230名、平均年齢19.91、 $SD = 1.22$ ）となった。2016年6月から9月に、講義時間内に質問紙を一斉配布した。

**質問紙の構成：**質問紙は、青年期の愛着スタイル尺度、児童期の愛着スタイル尺度、影響を受けた友人の感情側面尺度、フェイスシート、面接調査への協力依頼で構成された。

### 3. 結果と考察

各下位尺度間の関連をみるため、強制投入法による重回帰分析を行った（図1）。その結果、仮説は一部支持された。児童期の見捨てられ不安は、友人への不安感、対抗心へつながり、不安感は、青年期の見捨てられ不安を高めるが、友人への信頼感・安心感は、青年期の親密性の回避を低めることが示された。数井（2005, 2012）は、不安を抑えたり除去したりするためには、喜びが生じるような関係を他の存在者との間に成立させ、新たな満足できる人間関係を構築し、安定した経験をすることで安定した愛着スタイルへと変化していくと述べている。信頼感・安心感をもてるような友人との新しい関わりによ

り、他者との親密な関係を築くことができ、他者と関わられるようになるため、親密性の回避が減少すると考えられる。一方で、見捨てられ不安は、直接、信頼感・安心感に影響されるわけではないと考えられる。

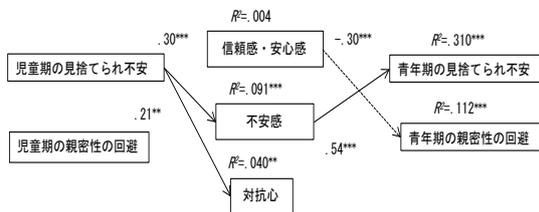


図1 各下位尺度間の関連。

注) \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$

### III. 研究2

#### 1. 目的

友人との関わりにおいて、友人に対して信頼感・安心感を持つことは、親密性の回避を低減させることが示唆されたが、質問紙調査では測り得なかった、具体的にどのような友人の存在から、どのような影響を受けたと認知しているのかによって愛着スタイルがどのように変化するか、質的に検討することを目的とする。

#### 2. 方法

**調査協力者と手続き**：27名（女性23名，男性4名，平均年齢19.67歳， $SD = 1.18$ ）。質問紙に回答した者のうち、個別面接調査への協力に同意した協力者に対して、2016年10月から12月に個別に行った。質問紙調査における児童期と青年期のIWMの高低から、一貫して安定型である安定維持群（女性2名），不安定型から安定型に変化した更新群（女性7名），安定型から不安定型に変化した衰退群（女性2名，男性1名），一貫して不安定型である不安定維持群（女性4名，男性1名），恐れ型からとらわれ型・拒絶型に変化した不安定維持更新群（女性5名，男性2名），とらわれ型・拒絶型から恐れ型に変化した不安定維持衰退群（女性3名）に分けた。

**面接内容**：影響を受けた友人の存在，影響，現在と過去の対人関係について尋ねる半構造化面接を行った。

**分析手続き**：逐語録をもとに，調査者と2名の

心理学を専攻する大学院生によって，語りが類似したものをグルーピングし，上位コードを作成，最終的なカテゴリの作成を行った。

### 3. 結果と考察

不安定型から安定型へと変化した場合，安心できる存在である友人から，今までとは異なる視点を得ることができることで，他者より深い関係を築いていきたいと捉えていた。

Rholes & Simpson (2004 遠藤他訳 2008) は，他者の行動を理解することは，人間関係についてのよりポジティブな適応的視点を促進し，自己や他者の視点に関する明確さを増大させるのに役立ち，別の観点を提供すると述べている。

すなわち，視点取得によって，自己を客観的にみることができるようになり，自己と他者の関係が明確になることで，見捨てられ不安が肯定的になるのではないかと考えられる。また，今まで重要な役割を演じてきたIWMを変更することは，これまでの自己や他者についての見方を変えることになり，不安や混乱を伴うことではないかと考えられるため，不安を和らげてくれる安心できる存在が必要となると考えられる。

### IV. 総合考察

信頼感・安心感をもてる友人がいることで，他者と関わることができるようになると考えられる。そして，友人から異なる視点を得ることで，他者と自己の観点が明確となり，自分の愛着スタイルが不安定であり，不一致であることに気付き，それまでの思い込みから脱し，愛着スタイルが安定型に変化しやすくなると示唆される。また，安心できる友人だからこそ，愛着スタイルの修正・更新における不安や混乱を和らげてくれるため，修正・更新することが可能となると考えられる。愛着スタイルの変化は，①安心できる存在，②自己と他者に対する客観性の向上が必要であり，この2点は相互に作用しており，どちらも必要であると考えられる。

本研究では友人への感情側面について検討したが，愛着スタイルの変化において視点取得が影響していることが示唆されたため，今後，質問紙調査を行い検討する必要があるだろう。